
道中私は考えた

もも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道中私は考えた

【Nコード】

N33990

【作者名】

もも

【あらすじ】

人生は自由である。今の私はそれをもてあました結果なのである。どうしてこうなってしまったのか。人生という名の道中私は考えた。そして次なる選択を迫られる。

道中私は考えた1（前書き）

私の小説には、あなたを不快にさせる表現が含まれている事があります。それでも構わない人だけお読みください。

道中私は考えた1

人生は自由である。しかし、誰もが思う訳ではない。自由とは相対的なものであり、絶対的なものではないからだ。だが、私にとって確実に自由であった。そして、今の状況に甘んじている私は、その自由をもてあました結果なのである。

12月24日、この日が何の日か分かるだろうか。言うまでもなくクリスマスイブである。だが、私は寝て過ごす以外何もする事がなかった。猥談に耽る友人もいなければ、何か打ち込む趣味もない。勿論恋人等いる筈もない。私が専門学校を止めなければ、今頃何をしているだろうか。考えるだけ無駄である。

私が専門学校を止めてもう2年近くになる。私は美容専門学校に通っており、ヘアメイクを勉強していた。その頃の私は友人も多く充実していた。しかし、何故止めてしまったのか覚えていない。大した理由ではなかった。そんな気がする。

気が付くと午後の7時になっていた。クリスマスイブである性か、街の明かりでいつもより明るく感じられた。自炊する気も起きずカップラーメンを食べた。専門学生時代の友人は何をしているだろうか。皆ワイワイ楽しく遊んでいるのだろうか。聖なる夜にただ無意味な時間を過ごしているのは、私だけだというのが容易に想像できた。そんな事を考えていると何か言い知れない焦燥に駆られ、普段誰にも見せられないような恥態を人知れず晒そうかと思ったが学生時代の顔だけのマネキンがこちらを見ているような気がして止めた。その時である。携帯の着信音が鳴りメールが届いた。澤田さんからであった。

「クリスマス 約束の場所で待ってます 今年こそ来てください」

道中私は考えた2

「クリスマス 約束の場所で待ってます 今年こそ来てください」

「————はあ？」

意味をさっぱり分からない。約束の場所？今年こそ？よく分からないが、どうやら私はその約束とやらを一度破っているそうではないか。聞き返そうか。いや、そんな失礼なことは私にはできない。もし、その約束とやらが彼女にとって何かしら思いが有るのなら、それをわざわざ聞き返そうとはあまりに不謹慎ではないか。

しかし、分からなければ話も進まない。私は彼女について、出来る限りの事を思い出してみた。

澤田さんは私の専門学生時代のクラスメイトであり、同じヘアメイクを勉強していた。成績優秀、スタイルも良く雑誌のモデルもしているらしい。街で彼女を見掛ければ誰もが宝塚の女性男優と間違えるだろう。私なら間違える。しかし、彼女は懐疑的で一切の人を寄せ付けず、いつも一人であった。その別世界のオーラは殆どどの生徒を彼女から敬遠させている様に思わせた。が、その隠しきれない理知的な雰囲気から彼女を尊敬する生徒も少なくなかった。一回生の時であったか、バレンタインで数え切れない量のチョコレートを女子生徒から貰っていたのを思い出す。そんな彼女とこの私がどんな約束をしたと言うのか。いつ社会から消されても可笑しくないような生活を送っている私に、今さら何があると言うのか。

ふと思った。これは間違いメールではないのか。そうだ、そうに決まっている。いや、彼女に限ってそんな事あるはずがない。私は悩み続けた。

もう夜の11時だ、時間ももうない。明日までに思い出さなくてはならない。思い出すまで今日は眠れない。そんな事考えている内

に私は眠りに着いた。

道中私は考えた3

その夜、不思議な夢を見た。延々と続く長い一本道を、ただ私が歩き続けるという夢だ。周りには人一人いない。それどころか建物すらない。薄暗い世界の中、確かにそこにある道を歩き続ける。ゴールは見えなかった。

結局何も分からないままクリスマスになってしまった。澤田さんは何処で待っているのだろうか。それ以前に何時にその約束の場所に行けば良いのだ。そんな事すら分からない。

これだけ考えて出て来ないなら何時間考えても同じであろう。部屋に籠っていても何も解決しない。私は澤田さんを探すことにした。外は賑やかだった。当然であろうか。街はクリスマス一色で染められていた。今まで見慣れた場所ですえ全く別物の様に感じられ私は感動した。それと同時にこの見慣れない街の中で、澤田さんを見つけて出す事ができるのか。少しでも不安になった。

私は歩き続けた。ただひたすら歩き続けた。どれだけ歩いても澤田さんの姿は見つからない。クリスマスの性かいつもより人も多く、澤田さんを見付ける事が更に困難に思われた。それでも私は歩き続けた。

宛ても無く私がさ迷っていると、何やら懐かしい声が私を引き止めた。

「お久しぶり。2年ぶりくらいですか。」

「お前は…川島か！」

この川島と言う男もまた、学生時代の友人であった。こいつといると、学生の飲み会で酔った私が川に飛び込んだのを思い出す。この川島がそう仕向けたらしい。嫌な奴だ。勿論私は酔っていたので詳しくは覚えていない。

「どうしたんですか？何か探している様ですが。」

「お前には関係無いだろ。私に関わって来るな。お前といると碌な事がない。」

「2年ぶりと言うのに、酷いなあその態度。」

川島は私と話している間、髪の毛が気になる様でずっと触っていた。「どうですこの髪型。五十嵐さんに切って貰ったんですよ。」

「い 五十嵐さん!？」

「そうです。なかなか似合っているでしょう。お望みならばあなたの髪の毛、僕が切ってあげても構いませんよ。丁度伸びて来てる様ですし。」

「お断りする!」

「相変わらず酷いですねえ、これ以上の立ち話も何ですから何処か寄りませんか。もう昼ですし。」

「何で私がお前何かと。」

「そんな事言わず、五十嵐さんもいますよ。」

「……………」

私は五十嵐と言う名前に弱かった。そして、私は川島と一緒にファーストフード店に入って行った。

道中私は考えた4

店のレジには五十嵐さんが立っていた。私と川島はそのレジに並んだ。

「驚いたでしょう。彼女ここでバイトしているんですよ。知ってました？」

得意気に話す川島が鬱陶しかったので私は何も返さなかった。

「今度は黙りですか。やっぱり貴方って人は愛想が無いですねえ。そんな調子じゃ皆に嫌われますよ。」

「お前に言われたくない！」

「あ　今しゃべりましたね。」

「うるさい！」

無意味な問答を繰り返している内に我々の番になった。五十嵐さんもこちらに気付いたようであったが、敢えて何も話さなかった。

「ご注文をどうぞ。」

「僕はこれをセットで、ドリンクはコーラでお願いします。貴方は何にしますか？」

「私は、珈琲だけでいい。」

「何ですか貴方。五十嵐さんがいるからってカッコつけちゃって。」

「だ　まれ　！」

注文を終えると我々は、レジの五十嵐さんの見える席に座った。

「これを飲んだら私はすぐに出るからな。」

「まあそんな事言わず。お代わりしたら良いじゃないですか。無料ですよ。」

「私は忙しいんだ。」

「そうですか。それは残念ですね。後一時間すれば五十嵐さんもバイトが終わってこちらに来るというのに。」

「…………　なら少しだけ待とう。」

「あら　それは良かった。それにしても、貴方って五十嵐さんの事

になると弱くなりますよねえ。まあ大体分かりますけどね。」

「断じて違う。お前が考えている事とは！」

「何でそんなに強がるんですか。素直に認めれば良いのに。そんな事だから貴方は、専門学校を止める羽目になったんじゃないんですか？」

「………… え？」

「え？ってなんですか。まさか貴方覚えていないんですか？」

「………… 悪かったな。」

「これだから貴方みたいな瞬間沸騰人間は。仕方無いですねえ。私が教えて上げましょう。良い時間潰しにもなりますしね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3399o/>

道中私は考えた

2010年10月21日02時58分発行